

人材の宝庫、インドから世界へ

世界が注目するインドに、
日本はどのように取り組むのか。
3月に帰国した西川裕治さんに聞いた。

国立研究開発法人 科学技術振興機構（JST）
国際連携アドバイザー **西川裕治さん**
（前 JST インド代表）

覚悟と楽観性が欠かせない

—インドでは事務所を立ち上げてゼロからのスタートでした。どのような目的で。

2014年8月にモディ首相が来日し、両国間での科学技術の関係強化が打ち出されました。そこで科学技術振興機構（JST）では本格的な共同研究や理系人材の交流を推進するために、デリーにリエゾンオフィサーを置くことにしました。



デリーの秋葉原といわれるネループレイスマーケット

—どういった点が一番難しかったですか。苦勞したことは？

インドは、ビジネスの難易度が高いことで有名です。事務所開設の作業は14年10月にスタート。いきなり「お役所仕事」の壁にぶち当たり、設立許可取得だけで9カ月かかりました。事務所物件探しも難航し、30件以上の物件を見ました。続いて、無理難題を要求してくる家主とのタフな条件交渉で5カ月かかり。現在の事務所に引っ越したのは15年11月のことでした。1人の現地職員採用でも約30人と面接してやっと見つけました。

「インドでは何をやるにも時間がかかり、約束は守られず、ドタキャンは当たり前。さらには、

相手にはずうずうしく何でも要求するが、自分は絶対に譲歩しない」という認識が一般的。また、英国統治の弊害といわれる肥大し過ぎた官僚制度に足を引っ張られます。そんなインドに進出する企業が経験する苦勞は計り知れません。そのため、十分な訓練を受け、かつ精神的にタフな人材を派遣する必要があります。毎日のように新たな問題が出てくるので、「問題への対処を楽しんでやる」というくらいの覚悟と、「命までは取られない、なんとかなるさ」という楽観性が重要です。

グローバルに大活躍する人材

—人材大国ぶりに驚いているとか。

インドには日本の10倍以上の人口がいます。20歳前後の人口帯では日本の20倍にもなります。ということは、単純に考えても天才の数が10倍以上いても不思議ではありません。また、生存競争の激しさは日本とは比較になりません。例えば、インド最高峰大学であるインド工科大学（IIT）。その入学共通1次試験には全国の秀才130万人が受験し、最終的に合格するのは1万人だけです。現在 IIT はデリー、ムンバイなど全国



日本の援助で急ピッチで建設が進む IITハイデラバード校キャンパス